

NHKの「チコちゃんにしかられる」を見ていると、「なんで一日が24時間?」という質問で、みんな「ぼーっと生きてんじゃねえよ」と叱られていました。しかし、この質問はおかしいと感じました。「地球ができた頃は、もっと速く自転していたが、月との衝突などで遅くなって今の24時間になった」と解説していましたが、それなら「地球の自転は、なぜ遅くなって24時間になったか」と聞くべきです。「なんで一日が24時間か?」と聞くと、どうして一日を24時間と決めたのかという意味になります。それ以前は、さておき、人類の歴史が始まってからは、



シュメール人

自転の周期（地球の一回転にかかる時間）はほぼ一定です。決めるだけなら、20時間でも、28時間でも良さそうなものです。この数はどちらも偶数ですね。これが、実はヒントです。一日が21時間ということになると、少し困りますね。一日は、大きく昼と夜に二等分されます。しかし、分数、小数計算の苦手な人には、二等分が難しくなります。ですからまず一日は偶数時間にした方が良いということになります。次に、三等分も出来てほしいですね。昔は、外で働く（狩猟・漁業）、住居内での生活、睡眠時間でおよそ三分ですから。結局、時間というのは等分しやすい方が便利なのです。四等分まで考えると、12、昼と夜もそれぞれ四等分まで考えると一日24時間ということになります。日本では四等分までいかずに、十二支の子、丑、寅・・・亥で十二等分しています。「草木も眠る丑三つ時」は午前2時過ぎ、昼の12時が午の刻で、「正午」、「午前」、「午後」の語源はこれからです。さらに、五等分まで考えると30、六等分まで考えると60になります。これが一分が60秒、一時間が60分の由来と思われれます。最初のチコちゃんの「なんで一日が24時間か?」という問には、2でも3でも4でも6でも12でも割れるからと、答えれば良かったのです。ところで、この、時間のいわゆる六十進法の考え方は、いつ頃考え出されたのでしょうか?令和三年度数楽通信「プリンプトン322」を見ると、古代メソポタミアの粘土板には、楔形文字で六十進法の計算が書いてあったとあります。そう四千年も昔に六十進法は考え出されていたのです。この古代四大文明の一つと言われるメソポタミア文明を築いたのは、シュメール人です。ところが、シュメール人についてはよく分かっていないことが多く、インターネットなどで検索すると、シュメール人宇宙人説とか、いろいろな話が出てきます。まあそれは置いて、角度も考えてみましょう。やはり、等分できた方がよいから、六十の倍数で、地球が太陽の回りを三百六十五日で一周するから一回転が360度となったのでしょう。もし、金星に知的生物がいれば、やはり一日は二十四日でしょうが、金星の公転周期は二百二十五日、不思議なことに自転周期も同じくらいの二百四十三日なので、一回転の角度は240度かもしれません。ここまで考えて、最初の問題に戻ると、地球の自転が速かろうと、遅かろうと、結局一日は、24時間ということですね。少し権威付けに”アインシュタイン”を引っ張り出すと、その相対性理論によると、”絶対時間は存在せず、時間は相対的なものである。”ですから、絶対的な一時間は、存在せず、地球の自転周期どうであろうと、それを24等分したものが一時間であり、「なぜ一日は24時間」という質問に対する解説は、ずれている気がします。まあ、チコちゃんは、五歳なので、”相対性理論”を知らなくても仕方ありませんね。私も理解できていません。